

アカハライモリ (中間種族) *Cynops pyrrhogaster* (Boie) (Intermediate race)

【選定理由】

かつては県下の平野部にも広く生息していた種である(島田, 2017)が、現在平野部の集団はほぼ姿を消しており、生息地は丘陵部及び山間部に限られる。ただ、丘陵部の個体群も、土地開発の影響を受けて減少しつつある。このため、将来絶滅危惧種に移行する可能性がある。



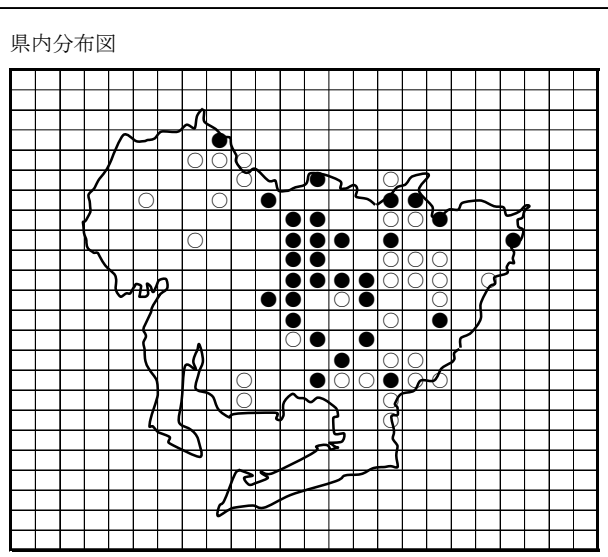
豊田市 (旧下山村), 2015年6月24日, 島田 知彦 撮影

【形態】

背面は黒褐色。腹面は赤からオレンジ色で、不規則な黒い斑紋がある。雄は求愛期である秋口から初夏にかけて、体側部や尾に青紫色の婚姻色が現れる。体長は地域によって様々であるが、中部地域では雄で全長 90~110 mm、雌で 100~130 mm ほどの個体が多い。

【分布の概要】

日本固有種。種としての分布は、本州、四国、九州とその周辺の一部の島嶼。種族としての分布は明確には定義されていないが、おおむね新潟県や長野県北部を除いた中部地方から紀伊半島にかけての地域。県内では尾張、三河の丘陵部から山間部にかけて。



【生息地の環境／生態的特性】

水田や水田横の水路、沼、ため池など多彩な止水環境にすむ。求愛期は秋口から始まり、越冬による中断を経て初夏まで。産卵期は4~6月。卵は水中の水草などに1個ずつ産み付ける。孵化した幼生は夏から秋にかけて変態し上陸する。幼体は林床で生活し数年で性成熟に達し、再び水中生活に戻る。

【現在の生息状況／減少の要因】

三河山間部では、河川や水田、池沼等様々な環境に見られ、比較的生息数が多い。一方、丘陵部では水環境の環境変化や耕作放棄に伴って減少している。平野部で姿を消した背景には、乾田化による止水環境の消滅や河川環境の改変、農薬による汚染等の要因が考えられる。アメリカザリガニ等の侵略的外来生物による捕食も大きな問題である。

【保全上の留意点】

生息地の水環境と、幼体の生活場所である森林の森林環境、及びそれらの間の個体の往来を妨げない、連続的な湿地環境が必要である。

【特記事項】

本稿では知多半島に生息するアカハライモリ渥美種族と区別する意味で、便宜上それ以外のイモリを Sawada (1963) にならって中間種族と称するが、Tominaga et al. (2013) によるミトコンドリア DNA の解析によれば、この種族は近畿地方に生息するいわゆる篠山種族と遺伝的に区別できず、両者を合わせて中部日本集団 (central clade) として捉えられる。なお、本県下では渥美種族と中間種族以外のイモリの地方種族は発見されていない。

【引用文献】

- Sawada, S., 1963. Studies on the local races of the Japanese newt, *Triturus pyrrhogaster* Boie, I. Morphological characters. Jour Sci. Hiroshima Univ., Ser. B, Div. 1 21: 135-165.  
島田知彦, 2017. 愛知教育大学に収蔵されていた明治年間のアカハライモリの標本一特に渥美種族と推定される個体について. 豊橋市自然史博物館研報 (27): 1-8.  
A. Tominaga, M. Matsui, N. Yoshikawa, K. Nishikawa, T. Hayashi, Y. Misawa, S. Tanabe, H. Ota, 2013. Phylogeny and historical demography of *Cynops pyrrhogaster* (Amphibia: Urodela): taxonomic relationships and Distributional changes associated with climatic oscillations. Molecular Phylogenetics and Evolution 66: 654-667.

(島田知彦)